
汎用複合様式適合型作曲専用 新標準音楽理論

3



はじめに

前章「新標準音楽理論②」にて、Major scale中心の世界におけるほぼすべてのコードワークスを網羅しました。ミクロ転調における借用技法、セカンダリードミナント及びII-V化、Real minor scale systemとの融合、全Diatonic scaleと特殊系スケールを合わせた全18本のコード&スケール、全12音ルート全コードファンクション、そしてBlues systemと、ここまでの習得にてメロディを支えるコードの役割に全て必要なスキルを身に着けたこととなります。

これから学ぶ「新標準音楽理論③」では主にHarmonizingを中心に、アレンジメント、メロディ構築へ更に役立つ技法を習得していきます。これから学ぶ技法には新しく学ぶ要素・材料はありません。すべてこれまでの「新標準音楽理論①」「新標準音楽理論②」で学んだ材料にて説明されます。そして、「新標準音楽理論③」で学ぶ全ての技法を身に着けたときには「完全なる音楽の自由」を手に入れることができるでしょう。

そして、音楽の入り口と出口は同じところにあります。その価値観の全ては音楽の中心核から醸成されているものです。その全てを理解・体得したときに真に「音楽の完全なる相対化」を知覚できます。ここまでたどり着いて初めて「音楽を『真』に心の底から楽しむことができる」ようになります。

同時に、この新標準音楽理論で取り扱ってきた音楽のジャンル・フィールドとはどのようなものか、「ポピュラー音楽」の境界線とは何か、そうではない音楽と一線を画している要素は何か、そしてなぜ画し分け隔てなければならなかったか、そのすべての疑問にも答えが出るようになります。

この新標準音楽理論③は心底音楽を楽しみ切る！というただひとつの単純な理由からだけで成り立っています。どうか学ぶ皆さんがこの喜びを共有し沢山の方にその素晴らしさを伝え広めてくれることを切に願っています。

第1回 Harmonizing基礎

メロディそのものにハーモニーを付けて和声化することをハーモナイズ(Harmonizing)といいます。ボーカルのコーラスワークや、ブラス・ストリングセクションのアレンジメント、効果的なツインリードギターなど、適応・応用範囲がとても広くあります。しかし、真の学習目的はアレンジメントの応用修得ではありません。Harmonizingを修得することにより音楽の最難関「メロディ構築」のスキルが確実に大きく向上します。それはメロディの完全なる絶対的的判断が可能になるからです。ここでの必要な準備スキルは単に今までの学習内容の理解だけで済みます。ただし、「完全な理解」が要求されます。インターバル、Altered scaleの対応コード、各コードプログレッションの瞬時的な判別が要求されてきます。これまでの復習が一層必要になってくることに十分留意してください。

簡易ハーモナイズ・ブロックコード

まずは、一般的によく用いられている「ブロックコード」を押さえておきましょう。メロディにコード構成音をなるべく維持した形で付加することで完成します。

次の楽譜のメロディにブロックコードでのHarmonizingを考えます。

注) ハーモナイズに用いる「ハーモナイズコード」と分けるために、通常で用いられているコードを「元コード」と呼んで区別することにします。

[3-1 Etude1]

付けられているコード=「元コード」

コード構成音である「P5=G」「M3=E」には元コードCでそのままハーモナイズします。「M6=A」はCのバリエーションコードとしてC6を使います。アボイドである「11=F」は同じくバリエーションコードのCsus4、テンションの「9=D」はCにテンション音だけを付加したCadd9を使います。

ブロックコードは非常に簡易で用いられますが、サウンドに深みがありません。より深みのあるHarmonizingを行うためには「Approach harmonizing」の技法を用います。

Approach harmonizing

メロディを「センタートーン」と「アプローチトーン」に分け、センタートーンには「元コード」を、アプローチトーンには元コードに関連し新たに作る「アプローチコード」でHarmonizingをします。

「センタートーン」と「アプローチトーン」

新標準音楽理論①の第12回目のでてきました。あらためて説明します。

定義

メロディのアプローチトーンがセンタートーンに上下半音、またはスケール上の全音で移動すること。

注1 アポイトノート、ノンスケルトーンはアプローチトーンでしか存在できない。

注2 全音の動きでノンスケルトーンからは解決できない。

センタートーン・・・メロディーを構成する音の中で重要な役割の音。省略出来ない音。

アプローチトーン・・・単独で存在せずにセンタートーンに移動する必要がある音。脇役の音

ここで先程の【3-1 Etude1】を見てみます。明らかにアプローチトーンになるのはアポイドの「F」です。アプローチトーンは基本的に連続しないのでその前後の「G」「E」はセンタートーンになります。また、最後の「E」はロングトーンなのでセンタートーンです。しかし最初の「A」とテンション音の「D」はアプローチトーンともセンタートーンとも取れそうなところです。

こういう場合、アプローチトーンだと仮定して別のアプローチトーンに音を置き換えてみます。アプローチトーンならばセンタートーンに解決できるポジションの他の音に置き換えてもメロディーはそのキャラクターを保ちます。メロディーのキャラクターが変化してしまえばその音は「置き換えることができない音＝センタートーン」確定となります。

テンション「D」を「D#」に変化させてみる。

テンション「D」を次の「E」音へ半音でアプローチする「D#」に替えてみます。

C

自然=Ap確定

メロのキャラクターは変わってなく、自然に聞こえるので「D」音はアプローチトーン確定です。

M6「A」を「A♭」に変化させてみる

M6「A」を次の「G」音へ半音でアプローチする「A♭」に替えてみます。

C

不自然=Apではない

この場合、メロディのキャラクターが大きく変化し元のメロディとは違う感覚に聞こえてしまいます。この「A」は変化させるべきではない音なのでセンタートーン確定です。

よって、センタートーンとアプローチトーンは次のように確定されます。

C

M6 コードトーン P5 11 アポイド M3 9 テンション M3

センタートーンに元コードでHarmonizing

Harmonizingは基本4和音で行います。元コードは「C」のトライアド表記ですが、M6はコードトーン扱いとなり表記をしなくても実質「C6」と演奏されることがよくあります。特にJazz系の楽譜においてD7Cは基本トライアド表記(サウンドに必要な場合は7th chord表記)とし、雰囲気や6th(M6)、7th、更にテンションを自由に加えて演奏します。このような演奏法を「テンションの自動付加」と呼びます。

この場合、センタートーンには「C6」でハーモナイズします。

アプローチコードでHarmonizing

アプローチの種類とアプローチコードの作り方

アプローチの種類は全部で5種類あります。そのうち3種類はDominant approach groupに括られます。

- ・ Altered dominant approach
 - ・ Diminished approach
 - ・ Dominant approach
 - ・ Scale tone approach
 - ・ Chromatic Approach
- } Dominant approach group

これらはアプローチトーンの状態や求めるサウンドによって使い分けていきます。まずはScale tone approachとChromatic Approachを取り上げます。この2種類から作られるアプローチコードで全アプローチトーンHarmonizingが可能になります。

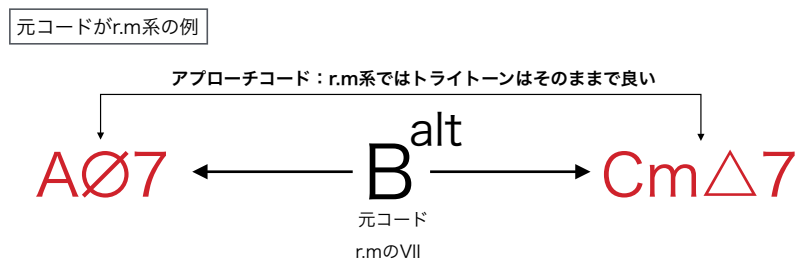
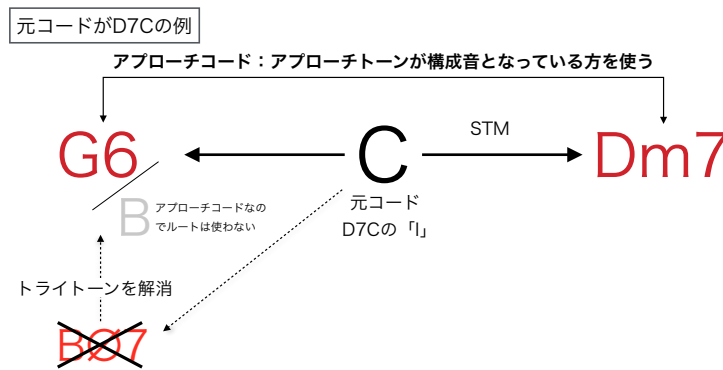
Scale tone approach (STA)

【条件】 アプローチトーンが元コードのスケール音である。

スケール音であるならばコードトーン、テンション、アボイドの種別は問いません。

【作り方】 元コードからスケールトーンモーションするコードを用いる

簡単に言えば元コードの隣のコードを用います。ここで注意が必要なのは、「元コードがD7Cの何番目か」といった対応スケールの素性を明確にしておく必要があります。さらにスケールトーンモーション時に行った「トライトーンを作らない」処理をアプローチコードに施さなければなりません。ただし、元コードがReal minor scale systemにあるときには処理は必要ありません。

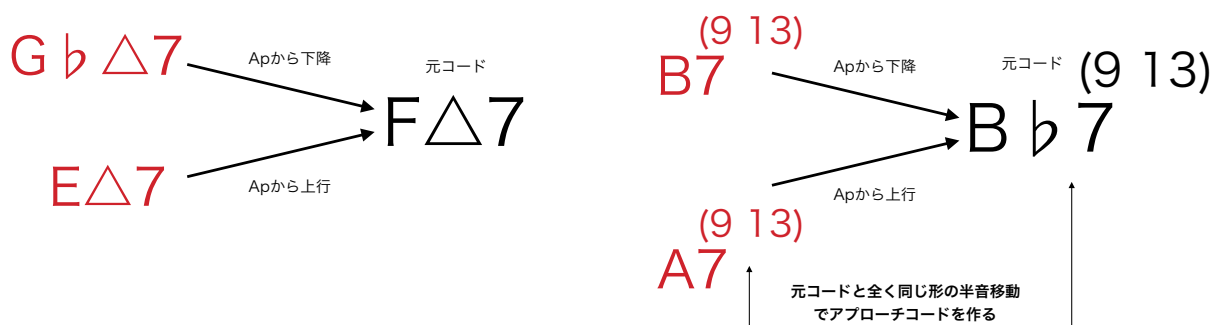


Chromatic Approach (Ch.A)

Chromatic Approachはとても簡単です。条件を満たせばオールマイティに使えますが、Scale tone approachも使える場合はそちらを優先させます。

【条件】 アプローチトーンが(上下)半音でセンタートーンに解決する

【作り方】 元コードと全く同じ形で(上下)半音にずらす



【3-1 Etude1】のHarmonizing

元コード C

Ap Ap

Dm7 STA G6 STA

Ch.Aも使えるがSTA優先のため使わない

好みで使い分けて良い

アプローチコード



完成

元コード C

C6 C6 Dm7 C6 G6 C6

Approach harmonizingからメロディへの応用

アプローチトーンはセントーに解決できるならば置き換えてもかまわないことから次のようにメロディを改変することができます。

アプローチトーンを変更

Ap Ap

B6 Ch.A Dm7 STA

半音で解決



C

C6 C6 B6 C6 Dm7 C6